世界遺産を目指す「富岡製糸場と絹産業遺産群」のオーセンティシティとバリアフリー共存に関する研究

建設工学専攻　508080-9　藤巻 遼平（ふじまきりょうへい）
建築史研究　指導教員　伊藤洋子

序章

研究背景・目的

現在、21世紀を「文化の世紀」と位置付け、歴史的価値のある遺産を人類共通の宝物と認識し、後世に伝えていくための動きが一層高まっている。更に、近年の少子高齢化や観光客の増加により、歴史的建造物におけるバリアフリーを検討せざるを得ない状況にもある。そこで本研究では、「建造物本来が持つオーセンティシティ（真正性と信頼性）と来訪者配慮のバリアフリーの共存」を思索し、21世紀型世界遺産に求められる歴史的建造物の保存手法を提示する。

研究方法

本研究の前半部分では、保存理念・近代福祉に関わる概論、世界遺産の現況考察をし、問題提起を行う。そして、後半部分で世界遺産暫定リストの「富岡製糸場と絹産業遺産群」への計画提案を行ない、本研究の結論として「オーセンティシティとバリアフリー共存論」を述べる。（図1）

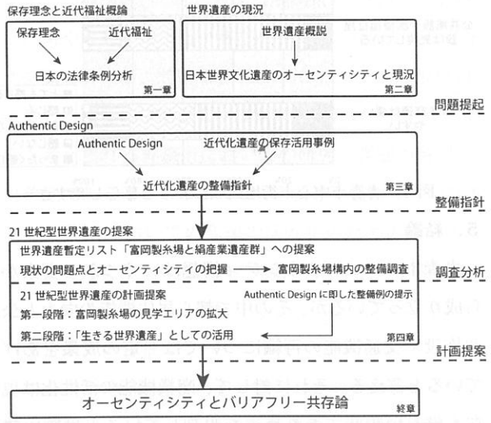

図 1 本研究の流れ

第一章　保存理念と近代福祉概論

1-1　保存理念の歴史

ここでは、19世紀後半のイギリス・フランスの保存思想からヴェニス憲章までの保存理念の歴史を追う。

1-2　近代福祉の思想

近代福祉の根幹的思想となるB.ミッケルセンによるノーマライゼーションから、日本に普及したバリアフリーデザイン（BD）・ユニバーサルデザイン（UD）まで、当時の人権に関わる時代背景と福祉思想の流れを考察する。

1-3　日本の法律・条例比較

日本の法律・条例の歴史を追い、47都道府県の福祉のまちづくり条例制定の変遷、バリアフリー新法との整備基準比較を通し、文化財保護と現代福祉の関係性を捉える。

第二章　世界遺産の現況

2-1　世界遺産概説

ここでは世界遺産の概説をはじめ、世界遺産条約批准国の変遷、世界遺産の地域所有数比較等を行う。

2-2　日本世界文化遺産のオーセンティシティ

日本としてのオーセンティシティを、最も端的に示しているのが、世界遺産登録のための推薦書である。この推薦書から、11ある日本の文化遺産を4つのカテゴリーに分類し、世界遺産から見た日本のオーセンティシティを捉える。

2-3　日本世界文化遺産の現況

日本世界文化遺産の内、歴史的建造物を中心とする８物件を対象として、建造物への整備状況・動線計画に関して現地調査を行なった。(調査期間:2009 年 9～11 月、図 2)その結果から、日本の世界文化遺産への整備の取り組みをまとめ、法律・条例の整備基準との比較を行う。

経路の項目	評価項目
乗り子の動線	一般ルート
	専用ルート
スロープ	スロープの有無
	スロープの勾配
	スロープの幅員(mm)
	手すりの有無
	手すりの素材
	手すりの高さ(mm)
階段	階段の幅(mm)
	階段の踏み面(mm)
	階段の蹴上げ(mm)
	手すりの有無
	手すりの高さ(mm)
	手すりの素材
リフト	介助の有無
	手すりの有無
エレベーター	出入り口幅(mm)
	広さ(mm)

設備の項目	評価項目
トイレ	手すりの有無（小便器）
	手すりの有無（個室）
	洋式トイレ
	乳幼児対応
	出入り口幅(mm)
多目的トイレ	広さ（mm）
	出入り口（mm）
	手すり
	通報装置
	オストメイト
公衆電話	乗り子用設置
	高さ（mm）
水飲み	乗り子用設置
	高さ（mm）
ロッカー荷物置かり	段差
	高さ（mm）
安全対策	安全柵の設置の有無

案内情報の項目	評価項目
経路のサイン	出入り口からの経路
	バリアフリールートの表示
	説明板
	英語・ローマ字表記
設備のサイン	階段・EV・ESのサイン
	バリアフリールートの表示
	説明板
	英語及び外国語表記
	乗り子用トイレのサイン
マップ・パンフレット	乗りすマップ
	英文パンフレット
	バリアフリールートマップ
関連施設チェック	沖縄与位置への設置
点字	沖縄与位置への設置
その他	乗りすの其迫の有無
	案内所の立地は良いか
	他施設、他案内の高さ(mm)
	ベンチ高さ(mm)

図 2 整備調査項目

第三章　Authentic Design

3-1　Authentic Design の定義

バリアをマイナスとして考えると、BDはゼロに近づけることが目的であるのに対し、UDは初めからバリアをなくし、デザイン性を伴ったプラスに引き上げることが求められている。一方、歴史的建造物はオーセンティシティを持つという観点からプラスと捉え、いかに質を落とさず、バリアを除くかが重要である。そこで、歴史的建造物の福祉デザインを新たに「Authentic Design」として定義する。（図3）

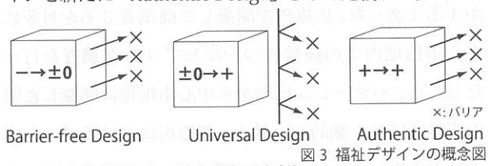

図 3 福祉デザインの概念図

3-2　近代化遺産の保存活用事例

世界遺産だけでなく、日本においても近代化遺産は注目の高まる分野である。本研究では、その近代化遺産に着目して Authentic Design を検討する。そこで、重要文化財を中心に保存活用事例をまとめ、整備手法の考察を行う。

3-3　近代化遺産の Authentic Design

近代化遺産の使命は、歴史と繁栄の軌跡を後世に伝えながら、現代に求められる用途として活用することである。そこで、近代化遺産のAuthentic Designとして求められる基本的な整備指針を以下に示す。

- **当初材は安全面を考慮しつつ、出来るだけ活用する。**
- **付加する場合は、遺構を視認できるようにする。**
- **付加する材料は、当初材と異なる材料を用いる。**

また、近代化遺産は人と建築の交わりによって築かれてきた現在の空間に価値があり、それを理解できるよう計画すべきである。そのためには、その遺産のどこにオーセンティシティがあるのかを厳密に捉える事が重要である。

第四章　「富岡製糸場と絹産業遺産群」への提案

4-1　「富岡製糸場と絹産業遺産群」

「富岡製糸場と絹産業遺産群」は、日本初の洋式器械製糸場である富岡製糸場（図4）をはじめ、碓氷峠鉄道施設（図5）等を含む10の資産で構成されている。本研究の提案物件として選定した理由は、世界遺産暫定リストで近代化遺産であること、また、福祉のまちづくり条例の制定が最も遅い群馬県の遺産であることが挙げられる。本研究では、対象を操業当初の遺構が数多く残る「富岡製糸場」とし、点在する構成資産の基点となるよう計画提案を行う。

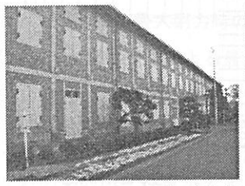

図 4 富岡製糸場

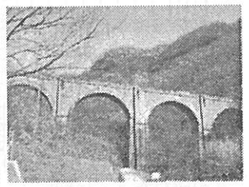

図 5 碓氷峠鉄道施設

4-2　富岡製糸場のオーセンティシティ

富岡製糸場の現状の見学範囲は、管理上の理由で東繭倉庫と繰糸工場の一部のみの公開であり、富岡製糸場の普遍的価値を理解するには程遠い。そこで、現状の問題点と富岡製糸場のオーセンティシティの把握を目的に、富岡製糸場構内の現地調査を行なった。(調査日:2009.11.17、2010.01.05)その結果、富岡製糸場のオーセンティシティは、「官営から民営に移りながらも、操業停止に至るまでの115年間に亘り一貫して製糸業を続け、当初の建造物を新たな建造物と共に利用し続けたこと」にある。つまり、まさに今敷地内に現存している建造物こそ、富岡製糸場の歴史的・普遍的価値を現代に伝える生き証人なのである。

4-3　21 世紀型世界遺産の提案

世界遺産登録に向けた富岡製糸場への提案は、現状の公開状況を踏まえると、保存活用を二段階に分け、オーセンティシティの理解向上のための計画が求められる。

第一段階として、富岡製糸場の生産システムを辿れるよう、見学エリアの拡大を図る。そして、第二段階として、遺構を日本の絹産業遺産の起点となる用途として運用しながら、敷地全体を「生きる世界遺産」として活用していく。

第一段階：富岡製糸場の公開エリアの拡大

第一段階として、生糸の生産を支えた建造物の公開エリアを拡大させ、富岡製糸場の世界遺産登録、保存意義を主張する事が求められる。富岡製糸場の普遍的価値を理解するためには、「生糸の生産システムを辿り、製糸場の果たしてきた役割を把握出来ること」が大切である。（図 6）

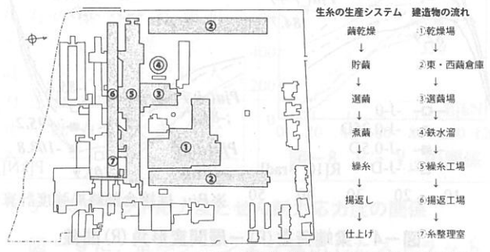

図 6 生糸の生産システムと建造物の立地

第二段階：「生きる世界遺産」としての活用

世界遺産登録の可否に関わらず、活用していかなければ保存する意味がない。それが近代化遺産である。そこで、富岡製糸場においては、他地域の絹産業遺産を広める起点としての「国立絹産業博物館」としての活用を提案する。これこそ、製糸の技術伝搬の模範工場として、全国に広める役割を担ってきた富岡製糸場に求められる用途である。また、富岡製糸場の遺構として残る繰糸機を活用し、繭から生糸に至るまでの工程を復活させることも「生きる世界遺産」として求められる条件といえる。

整備方針：Authentic Design に即した整備例の提示

本研究では、富岡製糸場の今後の保存活用において障害となり得る箇所の把握と、Authentic Design に即した各部の整備例の提示を行う。（図 7）なお、操業当初の繭や生糸を載せた台車を運ぶためのスロープなど、富岡製糸場の重要なオーセンティシティを示す遺構は出来るだけ手を加えずに活用を図る。整備基準・対象者は以下に示す。

整備基準：群馬県人にやさしい福祉のまちづくり条例

この条例において文化財は除外ではなく、富岡製糸場の建造物においても、遵守すべき整備基準である。但し、既存で遵守が難しい遺構に関しても、現地調査で利用可能と判断できたものは活用を前提とした整備例を提示している。

整備対象者：高齢者、障害者（肢体・視覚障害等）、子供

各々の行動特性に考慮した整備例を示すことで、利用者の多様なニーズに対応する。また、障害者の特徴や配慮すべきポイントの理解により、介助の質の向上にもつながる。

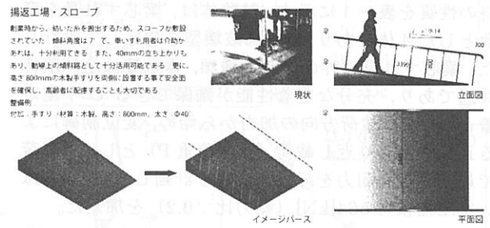

図 7 Authentic Design の整備例

終章　オーセンティシティとバリアフリー共存論

オーセンティシティとは、19世紀から続く、我々人類が歴史的建造物と向き合う度に考えなければならない要素であり、抽象的な概念である。それに対し、バリアフリーは近年に生まれた思想であるにも関わらず、法としての確立など具体化されている。その「具体と抽象」の双方に相容れない部分がある。これらの共存のためには、「遺産の普遍的価値の把握と整備可能箇所の選別」が不可欠である。それがまた、世界遺産登録につながり、後世へと遺産を引き継ぐための足がかりとなるのである。本研究で扱った対象は、歴史的建造物の近代化遺産というカテゴリーの一事例ではあるが、本研究が今後の近代化遺産の世界遺産登録及び保存活用の振興の一端を担っていれば幸いである。

主要参考文献

田原幸夫「建築の保存デザイン」学芸出版社（2003）
富岡市教育委員会「旧富岡製糸場建造物群調査報告書」（2006）
群馬県他「世界遺産暫定一覧表記載資産候補に係る提案書」（2006）
稲垣栄三「歴史的環境保存論」中央公論美術出版（2009）